

んうちに、ごしんぞうさまも、後を追うように死なさせる。新衛門さまはたったひとりになってしまった。なんでも、家も店も借金のかたにとられてしまったとかで、利衛門さまが築かれたしんしょは何もかものうなってしまうた。

そこで村の衆は、いつとはなしに、狐がはかりの上にいるという話は本当やったんや。そして、その話をみんなに聞かせたばかりに、もうかる狐はよそへいってしまったんやと、うわさするようになった。

太田 君代

武兵衛さんのイノシシ退治



武兵衛さのイノシシ退治

むかし、小木（今の諏訪町）に武兵衛さという元気ものがおらした。

その武兵衛さにとっておきのじまん話がある。それはナタ一丁で大イノシシを退治した話や。ある日、武兵衛さは弁当を背中にしよって、腰にはナタをぶらさげて山仕事にかけた。村を出てしばらく行くと山かけに清水のわき出るところがある。うまい清水で、村のものはたいていここでひとやすみする。

武兵衛さもここへくると足を止めた。その日はいい天気で、まだ村を出てさほどにもならんが、のどがかわいたのでさっそくかみこんで水をすくった。

ひとくち、ふたくち、水を飲んで、さて出かけようとしたとき、ガサガサと何かの近づく気がする。さては山犬か、それとも熊か、武兵衛さは近くの木かげにそっとかくれて正体をたしかめた。

そいつはガサガサと大きな音をたてながら清水のわき口までくると、ドサツとたおれるように腹ばった。

見れば小牛ほどもある大イノシシや、とんがらした鼻さきから、ブオー、ブオーとあらい息をはき出してベチャベチャ水を飲みだした。

まあなみのもんなら、腰をぬかすか、いちもくさんに逃げだすかしたやろうが、さすが武兵衛さやったわ。気を落ちつけてよくよくイノシシをながめた。

そのイノシシは、これはまた大きいも大きい、「ホホ白」といって、ホホのところの毛が白い、年をへた大ものやった。そいつがどこかで鉄砲をくらったとみえて、横つ腹から血が出とる。だいぶ弱っておるようじゃ。

これはよいものを見つけたわい。このえものおれがちようだいしてくれる、と武兵衛さは腹をきめた。さいわいイノシシめ、まだ武兵衛さに気づかぬようす。目の前に鼻づらつき出してむちゅうで水を飲んでおる。武兵衛さは腰からナタをぬいて身がまえると、こんかぎりの力で、エイッとはかりイノシシの眉間に一げきをくらわした。

こいつがまあ、ふつうのイノシシやったらそれでイチコロよ。ところが手負いとはいえ、なにしろホホ白や。武兵衛さの手もとがくるって、まともに鼻の頭にナタをくらったから、ブオーッと、武兵衛さがふつとはされるほどの鼻息でいきりたつた。

さあ、それからは武兵衛さとイノシシの一騎うちや。うなりくるうイノシシを相手にナタ一丁の武兵衛さは大かくとうやった。

くんずはぐれつなたたかいがどれだけ続いたか、さすがの武兵衛さも、相手のイノシシもくたびれはてた。おたがい相手の気はいをうかがいながら清水に近づくと、にらみ合って水を飲ん

だ。

ひといきついたら、イノシシめ、ブオーとうなった。負けてはたまるかど、武兵衛さも身がまえる。

またまた、大かくとうよ。そしてくたびれるとひとやすみして水、それからまた大かくとう……。

こんなことを何べんもしておるうちに、とうとう、武兵衛さはバツタリ、イノシシもドテーン。通りかかった村のしゅうがこれを見つけて村へ飛んで帰った。村中の男がてんでに鉄砲やら、何やかついでかけつけておどろいた。

なんと、さすがの大イノシシの鼻も武兵衛のナタで、すりきれた竹ぼうきみたいにささらになつとつた。

それからは、村で何かの集まりがあると、きまって武兵衛さのじまん話がきかれるようになった。

宮坂 久仁夫

金蔵さんのにぎり飯



